

# 声優ラジオのウラオモテ #04

夕陽とやすみは力になりたい？

🎙️ 二月 公

🎨 イラスト/  
さばみぞれ



KADOKAWA

朗読

伊藤美来

「声優ラジオのウラオモテ」

🎵 #04 夕陽とやすみは力になりたい？ 🎙️

AUDIO  
BOOK

電撃文庫

ドワンゴジェイピー  
オーディオブック  
限定特典

書き下ろしSS  
ブックレット！

NOT FOR SALE

『声優ラジオのウラオモテ #04 夕陽とやすみは力になりたい？』 オーディオブック特典  
© Kou Nigatsu 2021 イラスト/さばみぞれ © KADOKAWA

——先日、復帰ライブで乙女が輝くような復活を遂げた。

そのライブのあと、乙女から由美子に「ちよっとお話しさせて……?」と連絡が来て、由美子と千佳はラジオ収録終わりに近くの喫茶店で待っていた。

「あ、ふ、ふたりともお待ちせ〜」

乙女は由美子たちを見つけると、パタパタと駆け寄ってくる。

連絡は何度も取り合っているが、乙女と直接会うのはあのライブ以来だ。

由美子はい、ぱあっと表情を輝かせてしまう。

しかし、それを無理やりに抑え、乙女の出方を待った。

「ふたりとも、ライブ以来だね……。あのとき、来てくれて本当にありがとっね?」

乙女が困ったように笑い、両手を合わせてくる。それに対し、由美子は唇を尖らせた。

「いやあ、あたしはいたところで役に立たなかつたし？　結局、秋空さんに全部持  
ってかれたからなく。お礼を言われることはなにもしないっていつか」  
そんなやさぐれた態度を取ってみせる。

もちろん本気で言っているわけではなく、乙女を困らせたいだけだ。あるとき  
は本当にたくさんの心配をしたわけだし、しばらくはこれでイジらせてもらおう。  
案の定、乙女は困り顔で「そんなことないってば！　ね？　やすみちゃんがい  
てくれて、本当に嬉しかったから」！とこちらの顔を覗き込んでくる。

それに対し、千佳が面倒くさそうに告げた。

「いのち、ずっとスネてるんです。ライブ終わったあとも、寂しそいつとつてん」  
「ちよつとー！　いっらー！　それはバラさないでよ……」

思わず、悲鳴じみた声を上げてしまう。

間違いなく事実であるのだが、あれを真面目にバラされるのは恥ずかしすぎる。

それを見て乙女は笑みを深くし、やさしい目をこちらに向けた。

「ありがとね、やすみちゃん。心配かけてごめんね?」

「うん……。元気になって、よかったよ」

こうなってしまうとは、おどけることもできない。素直に彼女の言葉に頷いた。しばらく三人で話したあと、乙女がぱっと表情を明るくさせる。

「あ、そうだ! ふたりとも、お礼に何かご馳走させて? なんでも好きなもの言っていいから! なに食べたい?」

由美子は反射的に、「いやそんな、いいよ」と言い掛けた。

けれど、乙女は乙女で心配を掛けた自覚はあるのだろう。遠慮するのではなく、素直にお礼を受け取ったほうが彼女も気が楽かもしれない。

でも、こういつのつて千佳は付き合っただろうか……。とチラッと隣を見る。

ちよつとそのタイミングで、乙女が声を上げた。

「そうだなー、お寿司とかどう？　良いお店知ってるんだ」

お寿司、と千佳が反芻する。ぴょこん、と犬耳でも生えてきそつな反応だった。食べ物でつれば彼女はついてきてくれそつた。

三人の予定が合う日はあるかな、とスケジュールを確認する。

そつでふと、由美子は気になったことを尋ねた。

「そついえば姉さん、秋空さんとあれから連絡取つたの？」

乙女と秋空は数年ぶりの再会を果たした。積もる話もあったはずだ。

それはきつと、ライブ前の短い時間では語りつくせぬほどに。

だから、あのあとも交流があるのかと思っていたが――。

乙女は気まずそつに、指を絡めた。

「いや……、あのー……。連絡先は交換したんだけど……。特には……」

「あ、そ、そつなんだ」

それでいいのかな、と思いはするけれど、他人がとやかく言うことでもない。  
しかし、千佳がさりと「はあ。いいんですか、それで」と声を上げる。  
すごいな、この女……。

千佳の何も考えてなさそうな発言に、乙女はドキッとした表情になる。  
そのまま、訴えるように口を開いた。

「ほ、本当は……、紅葉ちゃんともっとお話したいし、来てくれたお礼もしたいし、何なら今回のご飯もいっしょに行きたいけど……。やつぱり、いっちらから連絡するのは勇気がいる、というか……。迷惑かもしれないし……」

たぶん、あっちも同じく思ってたよな……。

放っておいたら、お互いにちらちらと相手の様子を見るばかりで、そのまま時間経っていくのだろう……。

少なくとも、以前の乙女と秋空はそんな状態だった。

そういう関係もあるのだろう……、と由美子はスマホを取り出す。  
手早く操作して、電話を掛けた。

「あ、もしもし。いきなりすんません。今大丈夫ですか、秋空さん」  
「!？」

突然スマホを耳に当てた由美子に、乙女は不思議そうな目を向けていた。  
しかし、その相手が秋空だと知ると、身体をぴゅつと跳ねさせる。

「ややや、やすみちゃん……!? な、なにになになに、なんで……!?」  
動揺しながらも電話中だからか、声を抑える乙女。

それを微笑ましく感じながら、由美子は秋空と会話を進める。

『大丈夫、ですが。どうかしましたか、歌種さん』

「や、実は今、乙女姉さんといっしょにいるんですけど。姉さんが秋空さんに話したいことがあるって言うので」

『!?!』

耳元からも動揺した息遣いを感じる。

そして、全く同じような声を乙女も漏らしていた。

お互いの気が動転している間に、由美子はさっさと乙女にスマホを手渡す。

「ほい、姉さん。あとよろしく」

乙女は大変な慌てようだったが、電話を切るわけにもいかない。周りの迷惑にならないように身体を縮こまらせながら、「も、もしも!?!」と裏返った声を上げた。

あとはもう大丈夫だろう、と由美子はコーヒーに口を付ける。

すると、隣の千佳がこちらをじっと見つめていた。

「いついつときのあなた、なんだか物凄いわよね」

「誉め言葉として受け取って」

「褒めてないわよ」

「誉め言葉として受け取って」

乙女は、「あの、それでね、紅葉ちゃんもご飯づかなって……」とロロリとっていた。

